

歴史学における

〈漂流〉の現在

春名 徹

はじめに

昨年、私は史学会例会の企画をする機会を与えられ、一九九九年七月二十五日に五人の報告者を招いてシンポジウム「東アジアの漂流民と国家」を東京大学（文学部一番大教室）において開催することができた。本稿はその報告である（注1）

近年になって日本、朝鮮、琉球、中国など東アジア諸国を中心とする漂流民の存在が歴史学の関心を集めるようになった。とくに近世になると、これらの諸国のあいだで漂流民を相互に送還する制度が確立したため、記録も豊富となり、具体的な送還の実態も明らかになりつつある。この意味でようやく私たちは漂流民の視角から、近世の東アジアにおける国家と国家との関係、為政者から民衆に至るさまざまなレベルにおける異文化や異国に対する認識を議論し得る時期に到達したように思われる。

漂流にかんしては、このように国家が漂流民（他国からの漂着者および漂出した自国民）にどのように対処したか、という政策レベルの問題から、個々の漂流民や国家の異文化認識に至る多様な問題が存在している。

今後の研究の進展のためには、研究者相互の交流を促進し、共通の認識の基盤を得ることが必要と思われる。この意味で漂流研究の現在における到達点を確認し、今後の方向をさぐるものが、企画者の意図したところであった。

また漂流研究は特殊な一分野ではなく、究極的には近世の東アジアの海上で展開された対外関係の一部として位置づけられるべきものであり、究極的には〈人〉と〈もの〉と〈情報〉の流れをより豊かなイメージで描き出すことが目的であるというまでもない。

□漂流概念の検討をめぐって

最初に春名が「歴史学における〈漂流〉の現在」の題で問題提起を行った。企画者の主な関心はすでに述べたとおりであるが、要するに研究の多様化と視野の拡大のなかで、漂流研究の現状と展望を明らかにすることが目的である。それは反面では空白部分の確認（何が知られ、何が知られていないのか？）の意義をもつであろうことも指摘した。

最初に荒野泰典氏に報告をもとめた。——ふりかえってみると、漂流を歴史学の対象として扱う上で荒野氏の「近世日本の漂流民送還体制と東アジア」（初発表は『歴史評論』四〇〇号 一九八三年）は画期的な意義をもつものであった。従来、漂流民にかんしては、主として近世日本の漂流民が海外において経験した事象、つまり海外情報ないしは異文化体験に関心がむけられていた。荒野氏はそれを敢えて捨象して「彼らがどのような手続きを経て相互に送還され、その背後にどのような体制が国内的・国際的に成立していたか」という点に問題を限定し、近世日本における漂流民送還体制の成立のための条件を概観した。そして送還を可能とするには、最低限の国家と国家とのあいだの関係が前提となることを指摘した。そしてさらに具体的な送還体制の実態を日朝・日琉・日中関係について検討したのであった。

荒野氏の着目は、近世東アジア世界における漂流民の相互送還を国際関係のなかで位置づけることによって、歴史学の対象として漂流を研究する上での方向性を与えるものであった。

〔1〕 荒野泰典（立教大学文学部）

近世東アジア漂流民送還体制の総括的特質

荒野氏の場合、海禁を平和維持のシステムとして把握した上で、漂流民の送還をその「平和維持」の一環として位置づける。本報告においても近世日本において「漂流」という概念が内包していた多様な実態に着目しつつ、その多様性が近世の国際関係を維持する上で重要な役割を果たしていたのではないかという仮説を提示した。

そして漂流の概念からは外れた事件が制度上、漂流として処理されたいくつかの境界線上の事例の存在にたいして注意を喚起した。

①まず『通航一覽』巻二百、二百一、二百三によって寛永十二年（一六三五）以後、唐船が長崎以外の地に漂着した場合の具体的な処置を命じた規定が次第に定着していく過程を概観する。その上で、享保三年（一七一八）に肥前国平戸へ漂着した唐船の処置にかんする史料『通航一覽』巻二百一をあげる。平戸での糾問の結果、同船は長門で密貿易を行い、打払われた後、平戸へ漂着した事実が判明した。ただしこの船の乗組員は長崎の唐人たちからの嘆願によって助命、送還されている。事件の背景には、正徳新令以後、信牌を受けられなかった唐船が、数年来、長門、豊前、筑前に漂流と称して来航し密貿易を行っていたという事実が認められる。

②文政五年（一八二二）十二月二十三日、一唐船が薩摩国阿久根村沖に漂着した。同船は送還規定にもとづいて長崎に回航され、送還されたと『続長崎実録大成』には型通りに記述されている。ところが『長崎オランダ商館日記』一八二三年二月二日（文政五年十二月二十一日）条によると、この船は漂着を装って密貿易を行ったものであるが、その行為は実質的には黙認され、貨物の八分の三を差押さえられるにとどまった。

以上の①②は、唐船が「漂流」という名目で密貿易を行った事例である。

③はいわゆるプレスケンス号事件である。

寛永二十年（一六四三）、オランダ船プレスケンス号は幕府に通告せぬまま、日本沿岸で探検航海を行った。南部藩が上陸した乗組員を捕らえて国籍や目的を尋問した結果、オランダ人であることが判明。沿岸で大砲を放つなど違法の行為があったが、幕府は暴風雨のため漂着したのだというオランダ側の説明を受け入れて不問に付した（『通航一覽』巻二百五十一および村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第一輯）。これも漂流という解釈を拡大することによって緊張を回避した事例である。

④享和元年（一八〇一）、九人乗組のマカオ仕立てのポルトガル帆船が五島へ漂着、長崎へ回航された。この船がポルトガル船であることは、長崎商館長ワルデナールと補佐役ズーフの尋問で明らかにされ、長崎奉行も充分に認識していた。しかし事実を老中に知られれば処刑せざるを得なくなるため、アンボン（アンモン）船という体裁をとって、長崎奉行は七人をオランダ貿易船、中国人二人を中国貿易船によって送還する措置をとった。

日本側の『続長崎実録大成』の記事は事実を糊塗しており、『長崎オランダ商館日記』巻四には真相が述べられている。荒野氏は厳密には漂流とはいえないが、この種の実態が漂流概念の周辺に存在していたことを指摘し、国際関係におけるその意義を考えようとする。

□漂流の位相——朝鮮、中国、琉球

〔2〕松浦章（関西大学文学部）

環黄海・東海沿海漂着中国帆船について

本報告は、東アジア諸国の相互交流において海上交通のための重要な役割を担って来た黄海・東シナ海（東海）、すなわち中国・朝鮮半島・日本列島・西南諸島（琉球群島）・台湾に囲まれた海域における中国帆船の活動を、海難にかんする記録をもとに明らかにしたものである。

松浦氏は、漂流記録にもとずいて東アジア海域における航海活動の実態を掘り起こすという一連の考察を一九八〇年以來続けている。氏の研究は漂流という非日常を記載した文献に着目して、記録されることの少ない帆船の活動の日常を知ろうとする点に特徴がある。氏はまた漢字文化圏共通の意思伝達として〈筆談〉等により、この海域で記録が残された点についても注意を喚起している。

本報告では三種の文献を提示した。第一は琉球大学付属図書館保管の石垣島「宮良殿内文庫」^{ミヤラドンチ}所蔵文献による「琉球漂着中国船リスト」で、一七七一年～一八一五年の十例を示して注目された。このうち八例までは『歴代宝案』にも記事がないものである。

第二は「清代沿海帆船による商品流通」で『同文彙考』『歴代宝案』等から抽出した漂流中国帆船のうち積荷の明瞭なもの一〇三例（一七〇五〔康熙四十四〕から一八六一〔咸豐十一〕）を掲げて特定商品の各地への伝播を明らかにした。たとえば東北地方の瓜子や黄豆が錦州を積出港として寧波、上海、福建、廈門などへ運搬されている。

第三は「清代環黄海・東海沿海漂着中国船年表」であって、一六四四年〔順治元年〕から一八八五年〔光緒十一〕に至る中国船の朝鮮、日本、琉球への漂着三九五例を年代順に並べたものである。朝鮮は『李朝実録』や『備辺司謄録』、琉球は『歴代宝案』や『明清史料』、日本は『長崎実録大成』などを典拠とする。この年表は第二の「商品流通」年表の事例を含んでいないから、第二表を合わせるならば合計は四九八例となる。

つまり漂流史料にもとずいて、約五〇〇例におよぶ中国船の運行状況が把握し得るということでもある。紙数の関係で詳細な紹介はできないが、近世の海上活動の一端としての中国商船の活動の広がりを実感させるものであった。

〔3〕池内敏（鳥取大学教育地域科学部）

近世日朝間の漂流・漂着事件

池内氏は、日朝の文献の綿密な考証によって既に「近世朝鮮人の日本漂着年表」と「近世日本人の朝鮮漂着年表」を発

表している。この年表によると朝鮮人の日本漂着は一五九九年から一八七二年までに実に九七一事例、漂着人数九七七〇人を数える。そして日本人の朝鮮漂着は一六一八年から一八七二年までに九一事例、一二三五人である。この数そのものが従来、知られていた概数を大きく上回っており、私たちの近世漂流にたいする概念に変更を強いる性格のものであった。

本シンポジウムで氏は、日・朝の漂流民送還の実態を示した上、日朝間の漂流の特質を指摘した。

朝鮮側の漂流民の圧倒的多数は漁業・商業を生業とする民衆であり、日本側のそれは商品流通に携わる民衆であること、漂出、漂着の地域はかなり偏りがあること――すなわち朝鮮人の漂着地は日本列島西北方の島嶼部（対馬・五島・壱岐）、九州北部（筑前・肥前）、山陰西部（長門、石見・出雲）が多く、対馬が全体の三割以上、肥前（五島を含む）が二割、長門、石見・出雲が三割であり、これらの朝鮮人の出身地は朝鮮半島南部の全羅道（済州島を含む）・慶尚道に集中している。これに対して日本人の出航地は九州南部から北海道までの日本海側の各地、瀬戸内海に及ぶ。ただし漂流海域は東シナ海と日本海海域に限られ、漂着地は全羅道慶尚道に集中している。

しかし池内氏の漂流研究において、綿密な実態把握はあくまで基礎作業であり、氏自身は「近世における日朝相互認識の地域差・階層差のありように接近すること」に本来の目的を置いていることも指摘しておかねばならない。

日朝間にはいわゆる漂流記が少ない。おそらく漂出から漂着までの期間が一般に短く、平均五日前後であることが関係するのではないかと推定されているが、現在のところ朝鮮へ漂着した日本人の残した漂流記は五件、朝鮮人の残した漂流記は一件が知られている。そこに現れた漂流記録および絵画資料にはステレオタイプ化しない、ありのままの朝鮮人像が認められるという。池内氏はロナルド・トビの指摘するステレオタイプ化した〈異人〉像を念頭において、それとは対照的に、ありのままに日本人が捉えた朝鮮人像を提示してみせた。

また朝鮮―日本間におけるコミュニケーションには通訳の役割にも注目しなければならない。日本漂着の朝鮮人は、漂着地から長崎へ送られ〔対馬漂着の場合を除く〕、そこで対馬藩役人に身柄を預けられ、対馬を経て釜山の倭館に送られ、朝鮮側に渡される手順であったが、対馬、長州の両藩を除いて朝鮮語通訳は存在しなかった。これに対して朝鮮側

に漂着した日本人は現地から釜山へ送られ、倭館で身柄を日本側に預けられ、対馬を経て長崎または大坂へ送られたが、朝鮮側は現地に日本語通訳を派遣して応接させたのである。

〔3〕小林茂（大阪大学・文学研究科）

朝鮮、琉球間の漂流民送還と自力回航

小林氏は歴史地理学の立場から南西諸島関係の漂流記録に関心をもつようになり、九州大学グループの共同研究として環東シナ海域の漂流年表の作成にあたった。「朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表」はその成果である。東アジアにおける中国を中心とした送還のネットワークの一部をなす朝鮮―琉球間の漂流民送還の位置を明らかにするものとして注目される業績である。

小林氏は、この年表作成のなかで、朝鮮―琉球間の漂流において漂着した船が航海可能であり、かつ乗組員が希望する場合には、現地で保護した上で自力で回航・帰国させていた事例が多く認められることに着目し、今回の報告となった。シンポジウムで、関心を集めたテーマであったので、やや詳しく紹介しておく。

1. 自力回航の事例

（1）自力回航したが、帰国が確認できない事例。

〔琉球から朝鮮への漂着のうち四例〕（事例番号は表二「琉球から朝鮮への漂流年表」のもの）

①〔事例番号一〇〕一七九〇年（朝鮮正祖の十四年七月）。全羅道興陽県三島徳興里に漂着の琉球人（沖永良部島人七人）——これが自力回航の先例となる。

②〔事例番号一六〕一八〇九年（純祖九年五月）。巨済島利勿島に漂着の琉球漁船（十人乗組）。

③〔事例番号二六〕一八五八年（哲宗九年八月）。全羅道大静県（済州島内）漂着の薩摩船三隻（いずれも徳之島より砂糖を積んで帰航途上。それぞれ二十四人、二十六人、四十四人乗組）。出航後、うち二隻は再度、朝鮮国内に漂着。修理

の上、再度、自力回航。

④〔事例番号三〇〕一八七二年（李太王九年・中国の同治十一年一月）、全羅道大靜県（済州島内）に漂着の沖永良部島より帰航途上の薩摩船（八人乗組）。

（2）自力回航の途上で他の国に漂着、通常送還ルートで帰国した事例（表一は朝鮮→琉球。表二は琉球→朝鮮。数字は事例番号）。

○〔表一の二二〕一七三五年（享保二十）に沖永良部島に漂着した朝鮮済州島の船（男十八、女十〔うち二は幼児〕人乗組）は、自力回航を選んだが、徳之島に漂着、さらに出航後、大島漂着。翌年大島出帆、薩摩串木野漂着。結局、薩摩藩の手で長崎を経て対馬に送還されている（池内年表K-1参照）。

琉球人の場合の事例は――

①〔表二の一〕一七九〇年、那覇船（十四人乗組）が済州島に漂着、自力回航途上で再度漂流、浙江省定海府より中国の送還制度によって帰還。

②〔表二の一三〕一七九六年、琉球泊村の馬艦船（二十一人乗組）が浙江省温州府に漂着、帰還途上で朝鮮に漂着、自力で出航の所、ふたたび江南省崇明県に漂着、船を売却して送還される（帰国十八人）。

③〔表二の二二〕一八三一年、琉球宮古島船（八人乗組）が漂流して朝鮮国済州島に漂着、帰航途上、中国宝山県呉淞海灣口に漂着。中国の保護下に陸路、福建へ護送、送還（帰国は三人）。

④〔表二の二五〕一八四八年、琉球久米村の船（九人乗組）が、朝鮮国全羅道に漂着、自力回航の途上、中国江南省淮安府卓寧県に漂着、福州経由で帰国（帰国は八人）。

（3）いったん自力回航したが、ふたたび同国内に再漂着し、通常ルートで送還された事例。

①〔表一の三七〕一八四九年、朝鮮全羅道江津の漁船（七人乗組）が、奄美大島に漂着、自力回航の途上で再度、徳之

島に漂着、那覇へ送り、さらに貢船で中国経由、送還。

②〔表一の四一〕一八六〇年、朝鮮全羅道江津の漁船（九人乗組）が、奄美大島に漂着、自力回航の途上で黄檗山に漂着、牧港を経て琉球の貢船で福建へ送られ中国経由帰国。

（４）数度にわたる自力回航の末、帰国できた事例

○〔表二の一五〕一八〇五年那覇出帆の琉球船（九人乗組、うち女性四人）は薩摩に到着、翌年山川出帆、帰国途上で中国福建省福寧府漂着。翌一八〇七年福州発、帰国途上に朝鮮国済州島牛島に漂着〔朝鮮官憲に対しては日本への航海を隠して「大島に巡察に行った」と称した〕。同島より 壱岐を経由して薩摩山川港へ着、ここから帰航して国頭沖に達したが難破、五十一人が溺死した。しかしともかくも自力で帰還したことにはなる。

2. 自力回航の制度

（１）自力回航のタイプ

〔Ａ〕漂着地で保護されるが、いったん特定の場所に回航され、そこから自力で母国へ出発する。

〔Ｂ〕漂着地で保護を受け、そこから直接自力で母国へ出発する。

（２）琉球の制度

琉球への漂着者は、船が破損した場合とそうでない場合とで取扱いに相違があった。

「一 琉球へ唐船漂着之儀は無之候哉と御尋候ハバ、毎度漂着仕候、前々は破損不仕時は、琉球より帰帆申付、其段鹿児島へ申越、江戸・長崎へ申上候、若破船候へば、唐人共長崎へ差送申候へども、中山王依願、以来漂流之唐船致破損候共、直ニ唐へ送遣筋ニ、元禄九子年御免被成候、切支丹宗門疑敷異国船漂着、若破損候ハバ、唐人並荷物等共ニ長崎へ送越候筋ニ被仰渡候」。——宝永七年（一七二〇）の「上使御答書」のうち「島津家列朝制度」の「異国船御手當向並

諸異国之事」〔石井良助編『藩法集、八、鹿児島藩（下）』（創文社 一九六九年）九〇一―二頁〕。

（a）破損した場合、元禄九年（一九六九）以前は、長崎経由で送還、以降は琉球から直接中国に（朝鮮人漂流者の場合は中国経由で）送還される。この変化は、康熙二十三年（一六八四）の清の指示に対応するもの（豊見山一九八八）。

（b）破損しない場合、自力で回航、薩摩藩に通報、同藩より幕府に報告。

以上の点は『進貢・接貢船、唐人通船、朝鮮人乗船、日本他領人乗船、各漂着并破船之時、八重山在番役々勤職帳』（一八一三年）からも確認できる。

（3）朝鮮の制度

琉球からの漂流民を自力回航させることは、一七九〇年に慣例となる。〔前掲の年表二の一〇の場合〕
現地の官憲が漂流民に水路（自力回航）か陸路（中国経由）かを選択させた。宮廷へは事後報告。

3. 朝鮮―琉球間以外の自力回航例

（1）中国船の琉球漂着 三例

① 一六六五年 〔世譜附卷、卷一、一八―九頁〕

② 一六八八年 〔世譜附卷、卷二、二九頁〕

☆いずれも中国人の漂着を薩摩に報告しているので、自力回航と推定する。

③ 一七〇六年 福建船二十四人。松浦（一九八三）による〔歴代宝案二集 4 一六一七―八頁（台湾本）〕

☆自力回航に失敗し破船。

（2）琉球船の中国漂着 Aタイプの自力回航が多い。

（3）日本船の朝鮮漂着 一九世紀にはBタイプが例になっていた可能性がある。

前述の（表二の二六）（表二の三〇）など。

(4) その他

○一六六八～七〇年、日本船（尾張大野村）がバタン島に漂着、小舟を作って自力で中国領に着き、帰国した例。
○一六七〇年 中国船が日本貿易に赴く途上で朝鮮国全羅道旌義県に漂着。济州牧使の判断で、長崎へ向かわせる（松浦一九八二年 七二頁、『顕宗改修実録』卷二二、顕宗十一年七月丙寅条）。

とくに小林氏の強調されたのはBタイプすなわち漂着地で保護を受け、そこから直接、母国に出帆した事例である。自力で回航させるという判断は漂着地の地方官レベルによるものとみなされるから中央の記録には残りにくい。また目的を達したかどうかが判明しにくい、最近各国の漂流の事例が年表化された結果、ある程度、捕捉可能となった。従来、送還制度の考察の枠外にあったが、少なくとも朝鮮と琉球とは慣習化・制度化していたのではないかの主張である。

新しい問題提起であったため、相当の注目を集めながらも、シンポジウムの席上では、はっきりした対応ができなかったことは気にかかっている。漂流概念の再検討を含めて、今後、さらに検討したい課題のひとつである。（注2）

□異文化認識と漂流

琉球の対外関係について多くの論考のある真栄平氏からは、近世琉球が得た海外情報が、日本に漂着した琉球船によって伝播した事例について報告していただいた。

〔4〕真栄平房昭（神戸女学院大学文学部）

漂着記録に探る海外情報——土佐藩領に漂着した琉球船を中心に——

（1）琉球使節の中国体験——琉球から中国への進貢船が二年に一度の割合で派遣された結果、多くの者が福州から

北京まで赴く「唐旅」を経験した。このような旅行が二百年以上にわたって定期的に行われた結果、琉球は「生の」異国体験をもつことができた。

(2) この琉球ルートから近世日本へ伝わった海外情報は少なくない。まず琉球から進貢にかんする報告(唐之首尾御使者)によって薩摩藩に伝わり、そこから各地へ伝播した。十七世紀の明清交代、三藩の乱などにかんしては『華夷変態』所収の史料が、十八世紀にかんしては「中華之儀ニ付申上候覚」(『大清風俗書』所収。内閣文庫)、十九世紀のアヘン戦争、太平天国にかんする情報を伝えるものとしてたとえば「琉館筆談」(ハワイ大学ホーレー文庫)などがある。

(3) 以上を前提に、土佐藩領に漂着した琉球船の記録に含まれる「海外情報」を紹介する。

土佐藩領は黒潮の影響もあって漂着が多発する。一五九六年(慶長元)および一六〇三年(慶長七)にはスペイン船(いずれも浦戸漂着)、一六一六年(元和二)にはルソン船(清水浦)、そして琉球船は一六四〇年(寛永一七・下田浦)、一七〇五年(宝永二・清水浦)、一七六二年(宝暦十二・柏島沖)、一七九五年(寛政七・下田浦)、一八五四年(安政一・津呂)と五件。唐船は一七八九年(寛政一、羽根浦)、一八〇八年(文化五・室津)、一八二七年(文政十・浦戸)、一八五五年(安政二・浦戸)と四件を数える。

ここで紹介するのは、このうち宝暦十二年(一七六二)、琉球船の漂着である。同船は運天港を出航、鹿児島への途上で柏島沖に漂着し、のち大島浦(現宿毛市)に入港した十五端帆のジャンク船で、乗組員は五十二人であった。

土佐藩では藩学教授の戸部良熙よしひろが乗組員たちから事情聴取にあたり『大島筆記』(京都大学附属図書館)を残した。

その内容は、琉球人漂着之次第、琉球国躰、人物風俗、年中大略、官位之事、朝服之事、地名、諸産物太様、琉語大略、雑話上、雑話下に分類されるが、とくに雑話は注目すべき情報を多く含む。前半九十ヶ条は社会事情、後半五十八ヶ条は琉球人の唐旅の体験などを含む記録となっており、総体として十八世紀の東アジアにおける異国認識のあり方を示す「海外情報」としての史料価値をもつ。

とりわけ『大島筆記』は中国社会にかんしては大きな関心を示し、諸産物(茶樹、米、漆、油、胡椒)文房四宝(唐墨、筆、硯、唐紙)、生活様式(飲茶、生花、住居、食生活、絵画)、名所旧跡(蘇州の虎丘寺、杭州の岳飛廟など)、北京市

街（市中の雑踏、官庁街、紫禁城の様子など）について記述している。

また真栄平氏は、漂流を中心とする異文化認識には絵画資料を重視すべきだという提言とともに、具体例として土佐漂着の琉球船と人物の写生図（高知県立図書館所蔵）などを示し、その意義を説明した。

〔5〕生田美智子（大阪外国語大学外国語学部）

漂流民と異文化コミュニケーション——大黒屋光太夫の場合

最後に異文化コミュニケーションを専門とする生田氏に報告していただいた。近世末の日本では、東アジア世界では例外的な特性として西欧文化圏へ漂着する事例が増える。したがって異文化認識としての漂流体験について別の角度からの考察を期待したのである。

生田氏は初めて異文化を経験した漂流民のコミュニケーション獲得の過程を綿密に分析する。大黒屋光太夫のケースをとりあげたのは、まったく未知の言語に遭遇し、通訳もいなければ、媒介となる中間言語も知らない予備知識ゼロの状態でロシアの言語、文化と格闘し、それを習得し、最後にはエカテリーナ女帝に直訴して送還用の船を出す決意をさせるまでのコミュニケーション力を身につけたその体験が、またとない材料であるためである。

（1）江戸時代のステレオタイプの異国認識として外国人は「鬼」と認識された。つまりは異境（外国）と異界（架空の世界）とを同列に扱うのが一般であった。光太夫の成功は、漂着したアムチトカ島で、まずロシア人を島人と区別し「人」として認定したことにあった。

（2）ロシア人もまた日本人を黄金の国、帝号をもつ国の人として認定した。このため日本人は島人とは異なった扱いを受けた。このことによってコミュニケーション・ステータスが確立する。

（3）一行は「エト・チョワ」（これは何か）という言葉を知り、ロシア語習得の鍵を得た。異文化コード発見のキーワードを得たことは決定的に重大である。

(4) カムチャツカで飢饉にあたって最初は忌避していた肉食のタブーを破る結果となる。つまり極限状況の中で自文化に内在する規範やコードを逸脱することで、価値の相対化をなし得た。

(5) 洋服、洋食、ロシアの生活様式を経験するうちに、身体の内と外からロシアの文化コードが体内にくみこまれていく。

(6) さらに光太夫はロシア文字を書くことを修得した。これによってロシア語の音声化が可能となり、言語の習得を促進した。

(7) 光太夫が帰国を実現し得たのは、人的な関係としてキリル・ラックスマンとの出会いが大きな意味をもつ。そういう対人関係のなかで、彼は世界をみするまなざしを獲得することができた。仙台漂民が世界を一周したにもかかわらず、そのようなまなざしを獲得できなかったこととは対照的である。

(8) 光太夫は帰国実現のために宮廷生活に慣れ洋服や礼式を修得する必要があった。これはコミュニケーション手段の文体的価値と位置づけられる——などの指摘がなされた。

さらに光太夫の帰国後、幕府とラックスマンとの対応、将軍上覧のもとでの漂流民取調べ、根室で病死した小市の遺品が名古屋で公開されたさいの品物に対する説明など、光太夫の経験の周辺で成立した異文化コミュニケーションの性格に言及し、最後に、光太夫の帰国によって西欧にかんする出島とは異なる新しい情報チャンネルが出現したこと、ロシアに対する認識の変化がもたらされ、少なくとも人間としてロシア人を認識したこと、辞書類の編纂など、ロシア学の胎動がもたらされたことなどが指摘された。

同時代の他のコミュニケーション事例との関連において漂流民のコミュニケーションが異文化認識にもった位置づけという視点が提示されたことは貴重である。

□おわりに

報告者五人という欲張った構成をとったため、時間的制限から十分に議論が深められないというらみはあったが、報告後に参加者のあいだで活発な討論が交わされ、最初の機会としては満足すべき結果が得られたと思っている。しかしさまざまなテーマをやや総花的に扱う結果となったことはいない。次の機会があれば、より絞ったテーマで、そこから普遍的な問題が出てくるような形式を考えてみたいと思っている。

注

(注1) このシンポジウムを企画する機会を与えてくださった史学会ならびに岸本美緒氏(東京大学文学部)に感謝する。なお当日の総合司会には米谷均氏(日本学術振興会研究員)を煩わせた。準備の煩雑な事務には渡辺美季氏(東京大学大学院)が中心になってくださった。紙面を借りてあわせて感謝の意を表したい。

シンポジウムについては『史学雑誌』(第一〇八編第九号 一九九九年)に短い「例会報告記事」が載った他、渡辺美季「シンポジウム参加記」近世東アジアの漂流民と国家」(『民衆史研究会会報』四八号 一九九九年)がある。参照していただければ幸いである。なおシンポジウムにあたって各報告者からレジュメが配布された他、資料「近世東アジアにおける漂流民」(春名の原稿に各報告者が加筆)を準備した。日本、中国、朝鮮、琉球の国別に「漂流民の送還の起源と制度化」「漂流民の属する国家による対応の違い」「送還された自国民の扱い」「漂流民送還費用の負担」「近世的な制度の終焉」「西欧世界との対応」「異文化認識としての漂流」などを対比したものである。「参考文献」と「数量的な把握」のみを以下に掲げる。

(注2) シンポジウム後に小林茂氏は「自力回航」にかんして次の二論文を発表された。「徳之島に漂着した朝鮮人漂流者の自力回航と帰還」/『徳之島郷土研究会報』二十四号 一九九九年十月、「近世後期における琉球船の朝鮮漂着と自力回航」/『待兼山論叢』第三十三号 日本学篇(一九九九年十二月)。

参考文献

- 荒野泰典「近世日本の漂流民送還体制と東アジア」／『近世日本と東アジア』（東京大学 出版会 一九八八）
- 生田美智子『大黒屋光太夫の接吻』（平凡社選書 一九六六）
- 同 「光太夫の帰還とロシア学の胎動」／『むうざ』一六号 一九六六年
- 同 「ソフィアの歌と大黒屋光太夫」／『立命館経済学』四六巻六号 一九八八年
- 同 「光太夫による女帝拝謁描写の謎」／『窓』一〇九号 一九九九年
- 池内 敏「近世朝鮮人の対日認識論ノート」／『歴史学研究』六七八号 一九九五年
- 同 『近世日本と朝鮮漂流民』（臨川書店 一九六八）
- 川合彦充『日本人漂流記』（社会思想社・教養文庫 一九六七）
- 金指正三『近世海難救助制度の研究』（吉川弘文館 一九六八）
- 黒木国泰「近世日向沿岸漂着唐船・琉球船と密貿易」（１）（２）／『宮崎女子短期大学紀要』二三号、二四号 一九九七、一九九八年
- 同 「漂流・漂着船史料からみた一七・一八世紀環シナ海地域システムと鎖国体制」／『宮崎女子短期大学紀要』二五号 一九九九年
- 小林 茂「十五世紀後半の南西諸島南部の土地利用と景観——『李朝実録』所載の漂流記録の分析から」／丸山雍成編『前近代における南西諸島と九州——その関係史的研究』（多賀出版 一九九六年）
- 小林 茂（代表）『漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流』（九州大学大学院比較社会文化研究科 一九九七）〔科学研究費基盤研究 B——研究成果報告書〕
- 小林 茂・松原孝俊・六反田豊「朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表」／『歴代宝案研究』九号 一九九八年
- 関 周一「一五世紀における朝鮮人漂流民送還体制の形成」／『歴史学研究』六一七号 一九九一年
- 湯 熙勇「清末台湾における外国船遭難救助方法の改善（一八七六—一八九五年）」／『台湾史研究』一四号 一九九七年
- 豊見山和行「近世琉球の外交と社会」／『歴史学研究』五八六号 一九八八年
- 春名 徹「東アジアにおける漂流民送還体制の成立」／『調布日本文化』四号 一九九三年
- 同 「東アジアにおける漂流民送還制度の展開」／『調布日本文化』五号 一九九四年

- 同 「漂流民送還制度の形成について」／『海事史研究』五二号 一九九五年
- 松浦 章 「江戸時代における漂着唐船に関する一・二の資料」／『関西大学東西学術研究所紀要』一三号 一九八〇年
- 同 「李朝時代における漂着中国船の一資料」／『関西大学東西学術研究所紀要』一五号 一九八二年
- 同 「十八〜十九世紀における西南諸島漂着中国帆船より見た清代航運業の一側面」／『関西大学東西学術研究所紀要』一六号 一九八三年
- 同 「李朝漂着中国帆船の『問情单別』について」／『関西大学東西学術研究所紀要』一七〜一八号 一九八四〜一九八五年
- 同 「清代沿海商船の紀州漂着について」／『関西大学東西学術研究所紀要』二〇号 一九八七年
- 同 「清代客商と遠隔地商業——乾隆十四年の海難資料を中心に——」／『関西大学東西学術研究所紀要』二二号 一九八九年
- 同 「中国帆船の航海記録」／『関西大学東西学術研究所紀要』三二号 一九九九年
- 俞玉儲 「清代の琉球船が貿易を目的に漂流したことについての私見」〔中国漂着琉球船の年表を付録〕／『第四回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会 一九九九年
- 米谷 均 「漂流民送還と情報伝達からみた一六世紀の日朝関係」／『歴史評論』五七二号 一九九七年
- 劉序楓 「從清朝対日本海難難民の遣返来看清代中日関係」／『何石 金昌洙教授華甲紀念史学論叢』（汎友社 ソウル 一九九二）
- 渡辺美季 「清代中国における漂着民の処置と琉球」（一九九九年 東京大学文学部卒業論文・未刊行）↓加筆・修正した同名の論文が『南島史研究』五四号と五五号（一九九九年、二〇〇〇年）に掲載。同氏による琉球船の中国漂着事例年表も付録として分載。